

目次

魔女の不在証明^{アリバイ}

5

訳者あとがき 260

解説 横井 司 263

主要登場人物

- レスター・バラード……………アンティーク・ショップのオーナー
ニッキー・バラード……………レスターの息子
ルース・シーブライト……………ニッキーの家庭教師。叔母のような存在
マッジ・ガルジュール……………バラード家の家政婦
チエザレ・ガルジュール……………バラード家の運転手
アメデオ・ランツイ……………レスターの友人
マルグリット・ランツイ……………アメデオの妻
ステイヴン・エヴァーズ……………作家
チリオ……………イタリアクエンストワット県警察本部の刑事
ジュリオ……………カロツツア馬車の御者
ルイージ・セバステイアーノ……………アンティーク・ショップの支配人

「お姉さん、どこへ行っていたの？」

「豚を殺していたよ」

「お前は どうして いたの？」

『マクベス』より

第一章

その日は、いつもと同じように始まった。違う点があったとすれば、朝食時のレスター・バラードと息子のニッキーの口論が普段より激しかったのと、ぎすぎすした不愉快なその場に居合わせたルース・シーブライトが、心ならずも巻き込まれかけたことくらいだった。テラスのテーブルを片付けていたマッジ・ガルジューロが見せたあきれ顔が、やんわりとした警告になり、おかげでルースは、雇い主の生活に入り込むべきではない、と思い直した。といっても、崖の上に立つこの白亜の邸宅では週に二、三度は似たようなことがあったので、それほど気にする必要はないはずだった。四年間、バラード親子の反目についてなるべく考えないように努めてきたルースは、徐々にその関係性に慣れ、それが当たり前を感じるようになっていた。にもかかわらず、その日、顔面蒼白になったニッキーが部屋を出ていったあと、レスターがぎらついた目をして笑いながら車に乗り、ガルジューロ夫妻を伴ってサンアンテリオコへ向かったとき、急にルースは、胸の鼓動が速くなっていることに気づいたのだ。

何を恐れているのか、自分でもわからなかった。父子の言動は、これまで何度も繰り返されてきたのとはほぼ同じだった。それなのに、テラスのテーブルに一人きりになって、朝陽にきらめく湾の向こうの霧もやに浮かぶ山々を見つめるうち、もしかしたら、これまで愚かにもわざと見ないようにして、状

況の深刻さから目を逸らしてきただけなのではないかという気がしたのだ。

やがてわれに返ったものの、しばらく気を取られていたので、その間に何があつたか断言する自信はなかつた。

ニッキーが家を出ていったことにも気づかなかつたし、チェックのシャツと青いズボン姿の男が、いつから通り沿いの低い塀の上に座つて屋敷のほうをうかがつていたのかも知らなかつた。

その男に気づいたのは、電話に出るために立ち上がったときだつた。塀に腰かけ、両手でマツチを囲うようにして煙草に火をつけているのが見えたのだ。屈み込んで炎に顔を近づけていたので、顔立ちはよくわからない。が、その時点では、ルースは男のことをほとんど気に留めていなかった。実際、受話器を取ったときには、そんな姿を見たことをもう忘れていた。電話はランツイ夫人からだつた。

「今日の午後のことを確認しようと思つて電話したのよ、ルース」歌うような陽気な話し方はまるでイタリア人だが、彼女が生まれ育つたのはイギリスのサセックスだつた。「予定どおり、来てくれるんでしょ?」

一瞬、ルースは何の話か思い出せなかつたが、ややあつて答えた。「今日の午後——ああ、そうね」
「まさか、忘れていたんじゃないでしょうね」

「もちろん、覚えてるわ」

少し間をおいて、マルグリット・ランツイが訊いた。「何かあつたの? なんだか変よ」

「別に」と、ルースは言つた。「レストーとニッキーが、いつものひどい口論をしただけ……マルグリット、私、ここを出ようと思うの。もうこれ以上耐えられそうにないわ」

「出るって、イギリスに帰るってこと?」

「あるいは、別の仕事を探すとか」

「そんなの、だめよ。お願い、私のことも考えてちょうだい。時々お喋りができる仲間がいなくなったら困るわ」

「仲間」という言葉にルースは苦笑した。友情と呼んでいいかどうかわからないルースとマルグリットの関係は、この地に長期滞在するイギリス人が少ないがゆえに生まれたものでしかなかったからだ。「きつと、また誰か現れるわ」と、ルースは確信を持って言った。「何より、近頃は実質的にやることなく、退屈で仕方ないの」

「そうかもしれないけど、ニッキの立場に立ってみて。あの子の肩を持つわけじゃないけど、父親のレスターが扱いに困っているニッキを、あなたが少しづつまともな人間に近づけてきたんじゃないの」

「今は、あの見下げ果てたレスターを喜んで殺せる気分よ」

「私もそう思うことがあるわ。なにしろ、くだらない男ですものね。ああいう人は、子供を持つべきじゃないのよ。ただ、そういうわけか魅力的なところがあるのは否定できないけど」

「私には、その魅力が全然わからないわ」

本当をいうと、それは事実ではなかった。息子のニッキに道徳的によい影響を与える存在として住み込みの家庭教師兼叔母代わりに雇われた当初、ルースはレスターに強く惹かれていたのだった。だがニッキに対する彼の態度に、あつという間にその気持ちは冷めていった。自分が冷淡にされるよりも、冷め方は急速だった。幼い頃父を亡くしたルースは、父親の愛情というものに明確な理想を抱いていたのだ。

「彼はニッキーを怒らせることに、異常なほど情熱を燃やしているの」と、ルースは言った。「いつだって、口論を仕掛けるのはレスターのほうですもの。せっかく平穩で楽しい雰囲気であるときに、私に向かつて、これまでのニッキーの愚かな言動を面白おかしく話しては息子の様子をうかがうのよ。レスターの目を見ればわかるわ。ニッキーは挑発に乗らないようにしているんだけど、どんな顔が青ざめていつて黙り込んでしまうの。ニッキーが安易に挑発に乗らなくなったのは最近のことなのよ。自己制御をすべきだと考えたんでしょね。でも、いざ爆発すると、前より悪いみたい。正確には『爆発』じゃないわね。もつと静かだけど、より深刻なの」そこでルースは、今朝の口論について詳しく話している自分に苛立ちを覚え、口をつぐんだ。こんなふうにマルグリットに打ち明け話したのは初めてだ。「ちよつと大げさかもしれないわ。私もつい、かつとなつてレスターに意見したものだから」

マルグリットは含み笑いをした。「そんなの、なんてことないわ。レスターは気にも留めてないわよ。むしろ面白がっているんじゃないかしら」

「そのとおりよ！」これ以上話すまいと思っていたルースの口が緩んだ。「大笑いして、いやにうれしそうに目を輝かせて出かけていったわ」

「ナポリに行ったのよね？」

「ええ、ほつとしたわ。ガルジューロ夫妻と一緒に出かけたの。二人が休暇を取つて、家には私一人だから、頭を冷やすにはちょうどいいわ。頭に血が上る自分に耐えられないもの」

マルグリットが再び笑つた。「今朝の口喧嘩は特別だったの？」

「そういうわけじゃないけど」

「でも、そんなに心が乱れるには、いつもとは違う何かがあったんじゃないかしら」

とつきに言いよんだものの、ルースは応えた。「なんだか、いつもと違った感じだったの。なんというか——いいえ、ばかっているわね」

「何？ 最後まで言つてよ」

「つまりね、今朝の口論のせいで何かが起きるんじゃないかって気がしたの」

「何が起きるっていうの？」

「わからないわ。きつと気のせいね。でも、とにかく耐えられそうにないの。もう出ていくわ」

「だめよ。そんなことをしたら、ニッキーがどうなると思うの？ 今以上に手に負えない悪ガキになつたら、かわいそうじゃないの。あなただつて悲しいんじゃない？ まあ、そんなことは私にはどうでもいいんだけど。それより、今日の午後のことよ。お茶をしに来てくれるのよね？」

「ええ、伺うわ」

「だつたら、早めに来てね。三時頃がいいわ」

ルースが同意すると、マルグリットは「三時よ」と念を押して電話を切った。

受話器を置いて初めて、ルースはニッキーがまだ家にいやしくないか、ふと気になった。気乗りしないながらもニッキーの勉強を見てくれている元大学教授、ブルーノ先生の家へ一時間半前には向かっているはずだったが、出ていった音を聞いた覚えがない。マルグリットとの電話を聞かれたかもしれないと不安になり、階段のほうを見上げて「ニッキー！」と声をかけてみた。

答えはなかった。さらに二度呼んで、やはりニッキーは出かけたのだと思った。

再びテラスに出る。

料理人兼家政婦と運転手兼庭師のガルジュ一口夫妻が揃って休みを取り、屋敷に自分一人になれるときが、ルースが一週間でいちばん好きな日だった。煙草を置いていたテーブルに戻って座り、一本火をつけると、湾とその向こうの山々をいま一度眺めた。霽に包まれ、朝陽に照らされて山頂だけが宙に浮いているかのような山は、まるで作り物のように見える。どうやら、今日はかなり暑くなりそうだ。だがこの時間、藤とトケイソウに覆われた格子棚で陰になっているテラスは、わりに涼しかった。

藤の花は盛りを終え、茂りつつある青葉の中に薄紫の房が二、三残っているだけだ。同じ木から生えているのかしらと思うほど、丸い小さな金色の実をつけたトケイソウとしっかり絡み合っている。格子の上に大きなトカゲが一匹、身動きせずじがみついていた。

あそこにいる男性は猛暑になるのをもう予感しているみたいだわ、と、座って煙草を吸いながら、マルグリットとの電話で少し気持ちが静まったルースは思った。その男は落ち着かない様子で、そわそわと気ぜわしげだった。どう見ても、陽射しで温まった塀の上でのんびり一服するために座っているようには見えない。

そのときになって、ルースは電話を取りに立った時点で、すでに男がそこにいたのを思い出した。黒く陽焼けした小柄な痩せ型の男で、ブロンドの髪と、同じくブロンドの太い眉は、陽射しを受けてほとんど白に近い。細面という以外、これといって特徴のない顔立ちだ。チェックのシャツの袖を肘の上までまくり上げ、色あせた青いコottonのズボンに、染みのある、くたびれたズック靴を履いている。ブーゲンビリアの小枝がシャツのボタンホールに挿してあった。

ルースの視線に気づいたように顔を上げた男は、訝いぶかしげな目つきでこちらを見た。一瞬、話しかけ

てくるのかと思つたが、男は顔を背けてサンアンティオーコのほうへ続く道に目を落とした。ルースは立ち上がり、屋内に入った。

二階の自室に上がる。暑さで空気はむっとしたが、窓外の鎧戸が閉まっていて室内がほの暗いため涼しく思われた。姿見に映つたルースの顔は、幽霊のように青白かつた。だが、片方の鎧戸を押し開けて少し光を入れると、鏡の中の顔は明るくなつた。ルースは服を脱いで水着に着替えた。ほっそりした背中と肩、脚はすらりとした腿の上まで、しっかりと陽焼けしている。もともと色黒だということもあり、美しい自然な焼け方だつた。豊かなストレートヘアだけでなく、瞳の色も、長く濃い睫毛も黒だ。そうした南国風の色合いを備えているにもかかわらず、ルースはいつでもすぐにイギリス人とわかつてしまふのだつた。ロンドンで生まれ育つたことから、どうしてもにじみ出してしまうものがあるらしく、それが苛立たしく思えることもあつた。美人の多いこの国で、時には地元の人間と間違えられるたいと願うのだが、そういう経験は一度もなかつた。

水着の上に青いコットンのワンピースを着ると、紅白のスカーフを髪に巻いてサングラスをかけ、便箋と万年筆とタオルを持って一階へ下りた。家を出る際、屋敷のドアを開めて鍵を掛けるのを忘れなかつた。泳ぎに行くとき、いちいち、そんなことはしないのだが、外の塀の上に座つて落ち着きなく何かを待つている様子の男の存在が、一階のすべてのドアと鎧戸の戸締まりを確認しようという気にさせたのだつた。

大きなリュウゼツランとキョウチクトウのあいだの階段を下りて道路に出たときも、男はまだ塀に座つていた。ルースの足音を聞きつけた男は、さつきと同様の訝しげな鋭い視線を彼女に向けた。薄い色の太い眉毛の下の瞳は、緑がかったグレーだつた。人目を気にするような、どこか不安そうな目

つきに思えた。

今度も男が自分に話しかけようとしている感じがしたのだが、ルースの思い過ぎだったか、あるいは、何らかの理由で向こうが気を変えたのかもしれないなかった。新たに煙草に火をつけるのに使ったマッチを捨てると、男は両手をポケットに突っ込んで小銭をいじった。ルースは男の前を通り過ぎ、タオルをぶらぶらさせながらサンアンティオーコの方角へ歩きだした。道を曲がって男の姿が見えなくなる寸前にそれとなく振り返ってみると、男は火をつけたばかりの煙草を捨て、踵かかとで踏み消しているところだった。

〔著者〕

エリザベス・フェラーズ

1907年、ミャンマー、ヤンゴン生まれ。本名モーナ・ドリス・マクタガート。6歳の頃に英国へ移住し、ロンドン大学でジャーナリズムを専攻する。1930年代にモーナ・マクタガート名義で作家デビュー。イギリス推理作家協会（CWA）の創設メンバーとしてミステリの普及に尽力し、77年にはCWA会長を務めた。95年死去。

〔訳者〕

友田葉子（ともだ・ようこ）

津田塾大学英文学科卒業。非常勤講師として英語教育に携わりながら、2001年、『指先にふれた罪』（DHC）で翻訳デビュー。『極北×13+1』（柏艸舎）、『血染めの鍵』（論創社）、『ショーペンハウアー 大切な教え』（イースト・プレス）をはじめ、多数の訳書・共訳書がある。

まじよ アリバイ
魔女の不在証明

——論創海外ミステリ 239

2019年8月20日 初版第1刷印刷

2019年8月30日 初版第1刷発行

著者 エリザベス・フェラーズ

訳者 友田葉子

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル
TEL:03-3264-5254 FAX:03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266
WEB: <http://www.ronso.co.jp>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1835-1

落丁・乱丁本はお取り替えいたします